

各位

竹内浩三生誕100年記念事業 趣意書

ご承知のように、世界はいま、未曾有のコロナ禍のまっただ中にあり、日本も例外ではありません。中でも、未来を担う若い人たちを中心に、先が見えない閉塞感のような空気が社会を覆いつつあるように思えます。しかし、今から70数年前、現在よりももっと将来が見通せない戦時下で悩みつつ、本音で「日本が見えない」に代表される数々の詩を書いた一人の青年がおりました。のちに“天性の詩人”と言われた竹内浩三です。

竹内浩三は宇治山田市（現伊勢市）で生まれ育ち、19歳で映画監督を志し日本大学専門部映画科（現芸術学部映画学科）に入学しました。2年後には繰り上げ卒業となり、21歳の10月に久居の部隊に入隊します。そして、終戦となる昭和20年フィリピンで戦没しました。23歳でした。

彼は戦時の閉塞した時代に青春を過ごしましたが、夢を抱き、映画を見て好きな音楽を聴いて、失恋もしました。そして多くの詩やマンガ、日記や手紙等を残しました。作品には「詩をやめはしない」のような覚悟を綴った詩や「五月のように」や「金がきたら」のような明るくユーモラスな詩もあります。それらは戦後、詩人、同級生、研究者らによって紹介されて、それを讀んだ人の心をゆさぶり、現在まで多くの人々に読み継がれてきました。竹内浩三は戦時下の不自由な中、悩み苦しみながら、自らの本音を買って生きた若者でした。彼の詩は今を生きる若者たちのこころを捉えて静かに熱く語りかけています。「君たちはどう生きるか」と。

そんな中、今年（2021）は竹内浩三の生誕100年となります。まるで竹内浩三が「ひょんと生き返ってきた」ように思えます。この度、竹内浩三の生き方をより多くの人に知ってもらい、作品が若い世代に読み継がれていくために、伊勢市と関係団体で「竹内浩三生誕100年記念事業実行委員会」を立ち上げ、数々の記念事業を企画しました。

つきましては、みなさまのご支援、ご協力を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

2021年4月吉日

竹内浩三生誕100年記念事業実行委員会

委員長 岡田 美代子

日本が見えない

詩 竹内 浩

この空気

この音

オレは日本に帰ってきた

帰ってきた

オレの日本に帰ってきた

でも

オレには日本が見えない

空気がサクレツしていた

軍靴がデントウしていた

その時

オレの目の前で大地がわれた

まつ黒なオレの眼漿が空間に

とびちった

オレは光素(エーテル)を失って

デントウした

日本よ

オレの国よ

オレにはお前が見えない

一体オレは本当に日本に帰ってきているのか

なんにもみえない

オレの日本はなくなつた

オレの日本が見えない

金がきたら

詩 竹内 浩

金がきたら

ゲタを買おう

そう人のゲタばかり かりてはいられまい

金がきたら

花びんを買おう

部屋のソウジもして 気持よくしよう

金がきたら

ヤカンを買おう

いくらお茶があっても 水茶はこまる

金がきたら

パスを買おう

すこし高いが 買わぬわけにもいくまい

金がきたら

レコード入れを買おう

いつ踏んで わってしまうかわからない

金がきたら

金がきたら

ボクは借金をはらわねばならない

すると 又 なにもかもなくなる

そしたら又借金をしよう

そして 本や 映画や うどんや スシや バッ

トに使おう

金は天下のまわりもんじゃ

本がふえたから もう一つ本箱を買おうか

出典 『竹内浩三全作品集 日本が見えない 全一卷』

(小林 察・編、藤原書店)